

小島信夫「アメリカン・スクール」論

趙, 正民
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/16002>

出版情報 : Comparatio. 5, pp.156-162, 2001-03-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



小島信夫「アメリカン・スクール」論

趙 正民

一

もはや自明なものとしての「国家」は存在しない。ベネディクト・アンダーソンは、言語は「想像の共同体を生み出し、かくして特定の連隊を構築する」とし、言語の共有によって差異を超えた同一性を実現させたもの、イメージとしての「国民」を想像的に形成したものを「想像の共同体」とした。国家イデオロギーと言語が不可分の関係にあることは言うまでもないが、これについて言語学者の田中克彦は、「言語の呼び名あるいはその数えかたは、現実には民族とか、ことによると国家の数に対応させられている。しかしそれは、自然によってではなく政治の要求によって設けられた単位である」と述べている。例えば、韓（朝鮮）半島は同じ民族であると言いながら、政治的には「北朝鮮」（韓国では「北韓」と呼ぶ）と「韓国」とに分断されている故、言語においてもそれぞれ「朝鮮語」と「韓国語」と呼び、異なる言葉、異なるイデオロギーを主張している。これに対して、「中国語」は言語のレベルでは「漢語」と呼んだ方が自然だが、そうすると漢民族のみの言葉としてとらえられるおそれがある。中国国内には漢民族以外に五〇以上も異なる言語を持つ少数民族があり、彼らを政治的に包括するためには中華人民共和国の「国家の言語」として「中国語」と名づける必要があったと思われる。

このように各国の政治的状况により構築された言語は、「実存的かつ存在論的に「そこにある」のではなく、「外来のもの」との本質的な関係においてしか理解されえない」^三。換言すれば、一つの「国家の言語」はその国以外の「国家の言語」とのコンテキストの中でしか存在しないということである。

小島信夫の「アメリカン・スクール」には、以上述べたような言語の政治性や国家言語の性質がよく現れている作品である。この作品には三人の英語教師が「田舎の県庁」から「六軒の舗装道路」を歩いて「アメリカン・スクール」まで至る課程が設定されており、その空間の中には各人物が「日本語」と「英語」の差異に翻弄される姿がそれぞれ描かれて

いる。本稿は言語の政治性や国家言語が持つ性格を視野に入れながら、「アメリカン・スクール」における、アメリカ力による被占領コンテキストを読んでいくことを目的とする。

二

小島信夫は「アメリカン・スクール」の「あとがき」で、次のように述べている。

僕はこの見学を終戦後二年間ぐらいの所に置いてみて、貧しさ、惨めさをえがきたいと思った。そのために象徴的に、六軒の舗装道路を田舎の県庁とアメリカン・スクールの間に設定してみた。それから今までは「僕」として扱う男を、群像の中の一人物としておしこめてみた。

第一小説集のさいごに述べたように、やはり僕は小不具者の小説を書いていて、と述べなければならぬ。それからユーモアだ。僕は前には、ユーモアに執着するのは本質だろうと言ったが、それよりも、この世の、この時代の流動性、不安定に対する姿勢からくるといった方がよいかも知れない。^四

このような作者の説明から、小島信夫の「アメリカン・スクール」はこれまで、「象徴」、「ユーモア」といった言葉を中心に論じられてきた。例えば田中美代子は、「作者は、敗戦国の、かつての敵国語教師という象徴的な人物群の中に、占領下の日本の典型的なドラマを描き出そうとするのである」^五とし、作者とほぼ同じスタンスで作品を評価している。また、利沢行夫は、この作品を風刺文学であるとした上、「強くなりえない小島の弱い人間」の伊佐と「強者なのであり、笑われるということに我慢できない」山田、そして「本当に強い人間であるから、強がったりする必要はない」女教員ミチ子で代表される「三つのタイプの人間」が描かれているとした^六。多少図式的な解釈ではあるが、氏の指摘も大まかに言えば作家の発言に通じるものであろう。

江藤淳は小島文学の理解者の筆頭といえるが、「アメリカン・スクール」について「積極的に「動こう」としては切り切っている山田は、最後に面目まるつぶれになり、「ぐず」で「動けない」伊佐のほうは、ほかな

らぬその因循姑息な無能さのために、かえって最後に目的を達成してしまふ。この作品は敗戦直後の日本の社会の戯画としてすぐれているだけではなく、「西洋」Ⅱ「近代」と土俗との接触面を鮮やかに切りとつていふという意味でも特異な作品であるが、山田に対する作者の「悪意」と不信は、それが土俗的な核、つまり日本人の生活をささえるある根源的な形式に根ざしているため、きわめて効果的な、説得力に充ちたものになっている。^七と評価している。

江藤淳は「アメリカン・スクール」から、「積極的に「動こう」とする山田と、そうでない人、つまり「動けない」伊佐のような人物で代表される日本人のグループを想定している。そして、二つのグループの人々がとる行動の間に生じるずれを「敗戦直後の日本の社会の戯画」として読み取っている。続けて氏は「アメリカン・スクール」で、英語の流暢な女教員ミチ子、同情的に描かれているのは注目にあたいする。これは、小島氏が女性に甘いからというより、女性が小島氏の哲学のなかでは、「動く」ことを許された存在だからである。^八としている。つまり、「動こう」とするか「動けない」かで人物像を定める江藤のフィルターは、女性と男性を「動く」人と「動かない」人の対置でとらえるところにも反映されている。

以上のような江藤淳の評価の中で注目したいのは、「山田に対する作者の「悪意」と不信は、それが土俗的な核、つまり日本人の生活をささえる根源的な形式に根ざしているため、きわめて効果的な、説得力に充ちたものになっている」という部分である。即ち、氏は山田が「醜い日本人」として描かれているのは、山田を日本人たらしめる「土俗的な核」「根源的な形式」に背いているからだとしている。ここで江藤淳のいう「土俗的な核」「根源的な形式」とは、おそらく日本人が日本国民であるために必要不可欠な「日本語」を指していると思われる。山田は占領軍の言葉である英語を上手に話すことによって支配者側に一歩近付けると思い、日本人同士でも英語で話そうとしており、アメリカ人以上にアメリカ人になりきって見せようとする。このような山田の行動は江藤淳のいう「土俗的な核」つまり「日本語」を否定しているように見える。

右のような江藤淳の評価は妥当だと思われるが、しかし一方では若干の違和感を覚える。それは「土俗的な核」「根源的な形式」に根ざしている否かで登場人物を評価すること、更に言えば「土俗的な核」「根源的な

形式」が自明なものとして、また実在するものとして想定されていることに起因する。江藤淳の言う「土俗的な核」「根源的な形式」が「日本語」であるとする、ラングのレベルでしか存在しない「日本語」を實體として捉えているところにはやはり異議がある。あるべきものとして「土俗的な核」（日本語）は存在しない。もし存在するとすれば、それは「外来のもの」（この作品では英語）とのコンテクストの中にしか存在しないのである。

それと同時に、アメリカ人と日本人の区別が実体的にあるわけでもない。が、客観的に日本人たらしめる物事があるように見えるのは、私たちが対象を言語的に分節化し差異化することで認識しているからである。例えば、私たちがアメリカ人と日本人を認識するということは、アメリカ人は日本人とは「肌の色が違う」「髪の色が違う」「眼の色が違う」「鼻の高さが違う」という同じ意味と同じ価値、異なる意味と異なる価値基準で対象を区別することである。しかし、対象を分節・差異化することは「恣意的」なものであるため、どのような基準を用いるのかによって既成の秩序が覆されたりする場合がある。

「モデルティーチング」を巡って役員の柴元と山田がやり取りする場面を見てみよう。

「モデルティーチングをぜひやらせてもらうべきですよ。ねえ柴元さん。後はわれわれの力を相手に見てもらうべきだと思うのです。これはちよいどいいチャンスじゃないですか。出来れば、成績の順位をきめてもらってもいいのです」（略）

「たびたび申しますがね。それは先方で困るかも知れませんのでしてね」

「困る？そうでしょうか。同じ英語をつかう国民同士のあいだからですよ」^九

冒頭にも述べたように、一つの言語を共有することは差異を超えた「想像の共同体を生み出し、かくして特定の連隊を構築」する。山田がここで言うように、アメリカ人と同様に英語を共有することで彼が「おなじ英語をつかう国民同士のあいだから」に組み込まれることも不思議なことではない。つまり、同じ言語を使うか使わないかでアメリカ人と日本

人を分節し認識することもあり得るのである。

しかし、読者に山田が時代の動きに便乗して「醜い日本人」を演じているように見え、不信任を与えるのは何故なのか。

この作品は、「終戦後三年、教員の腹は、日本人の誰にもおとらずへつていた」時期、つまり敗戦後のアメリカ被占領期をその背景としている。「支配者」と「被支配者」、「強者」と「弱者」といった権力の力学が働いている占領下で、山田は支配者の権力を利用して彼等と対等な位置を得ようとしている。彼にとって「英語」とは「アメリカ」そのものであり、また「弱者」の立場を隠蔽するためには、英語が持つ権力に縋り付く必要があった。読者は英語の持つ権力やイデオロギーに翻弄されてしまう山田の姿に違和感や不信任を覚えるのだと言つてよい。

ところで、女教員のミチ子に対する作者の姿勢は、同情的であり、また「強者」として描いているとする指摘が多い。利沢行夫は「彼女は山田のように強者になろうとはしない。なぜなら、彼女は本当に強い人間であるから、強がったりする必要はないのである」とし^{一〇}、江藤淳もミチ子は「同情的に描かれて」おり、「動く」ことを許された人物であるとしている^{一一}。また、田中美代子も「女教員のミチ子にせよ、靴ずれの手当てをしてくれるアメリカン・スクールのエミリーにせよ、ここでは女性主人公にとつてつねに庇護的な、やさしい、別世界の生きものとして描かれ」ていると述べている^{一二}。

確かに、ミチ子は自分が英語を使う時「外国語で話した喜びと昂奮」に支配されることや「ハイヒールをはくことをひそかに楽しんできた」ことに自覚的で、反省的である。また、アメリカン・スクールの中の住宅で、幼児の世話をしている日本人の小娘までも「天国の住人」のように思った彼女は、「そつと目頭をおさえる」など、屈辱的な日本の立場を深く認識している。

しかし、ミチ子が諸論の言うほど「強者」であり、「動く」ことを許された人であるなら、空腹を抱えながら六キロもある距離を歩いてアメリカン・スクールまで行くことやハイヒールを運動靴に穿き替えながらアメリカン・スクールまで行くことに疑問を持ったはずであろう。彼女がいわゆる「強者」ではないことは、小道具の「箸」や「ハイヒール」がもつ記号内容によってより鮮明に浮き彫りにされる。

ミチ子は「盛装のつもりで、ハイヒールを穿き仕立てたばかりの格子縞のスーツを着こみ帽子をつけているが、かえって卑しいあわれなかんじ」を与える姿で見学団に参加する。その彼女は「アスファルト道路を歩きはじめてから、何か忘れものをしたこと」に気がつくが、それはお弁当を食べるための「箸」であった。忘れ物を借りるためにミチ子は伊佐の怪我に注意を払ったり、米軍からもらったチーズの缶を伊佐に渡したりする。そのうちに彼女は「異性にたいして忘れていた愛情がほのぼのとわいてくるよう」に思ったが、それは、「忘れ物を借りることのために、そういう卑しい借り物をする事で、愛情がうえた胃袋のあたりからふくれあがってくるようにかんじたのかも知れなかった」ことにすぎなかった。彼女の打算的な心情に対する作者の姿勢は、小説の最後に描かれる伊佐から箸を取ろうとして足を滑らせ倒れてしまう滑稽な姿に表れる。

「ねえ、さつき……」

彼は二度言われてミチ子の要求が何であるのか、ようやく察した。

(略)

ミチ子は伊佐の手からその包みを受け取ろうと両手をのばした。このあいだにはものの十秒とたつていなかった。

ミチ子は両手をのばした時に、伊佐はリレーの下手な選手とおなじく渡しきらぬうちに自分が走り出していた。ミチ子はミチ子で顔を赤くし、つい身体の均衡がくずれた。

ミチ子は、ハイ・ヒールをすべらせ、廊下の真中で悲鳴をあげて顛倒した。その時彼女の手から投げ出された紙包みの中からは二本の黒い箸がのぞいていた。^{一三}

終戦後日本では「GHQの方針として、原皮の輸入は不許可ときめていたので、原皮の生産再開は当分見込みなく」、「昭和二〇年後半には、靴の配給はまったく中断されたので、ヤミ市で粗悪な材料をつかった靴でも三・四〇〇円」^{一四}の高い値段で取引されていた。ミチ子がアメリカン・スクールに行くために用意したハイヒールも恐らくヤミ市で高い値段で取引されたものであろう。更に、彼女が履いていた「ハイ・ヒール」は単なる「履物」というよりも、記号内容として「アメリカンカルチャ

」の一部分を示している。背伸びして手に入れた「ハイ・ヒール」は、結局ミチ子をして足を滑らせて転倒させてしまう。その瞬間に飛び出した「二本の黒い箸」という小道具は、「ハイ・ヒール」といい対照を見せている。

諸論者が「強者」または「動く」ことを許された人物」としたミチ子は、しかしアメリカ文化を記号内容とする「ハイヒール」によって転覆され、しまいには「日本的わびしい道具」の「箸」に嘲られるのである。

「アメリカン・スクール」は占領下の日本におけるアメリカの象徴であると言える。そうすると、アメリカン・スクールの校長先生であるウィリアム氏は、アメリカを代表する最高権力者になるのである。一見、「強者」であり、「動く」ことを許された人物にみえる山田とミチ子は、ウィリアム氏の次のような一言によってその行動を制約、否定され、また排除される。

これからは、二つのことを厳禁します。一つは、日本人教師がここの教壇に立とうとしたり、立つたり、教育方針に干渉したりすること。もう一つは、ハイ・ヒールをはいてくること。以上の二事項を守らないならば、今後は一切参観をお断りする。^{一五}

三

山田とミチ子と一緒にアメリカン・スクールに向う伊佐の場合はどうか。

山田やミチ子とは違って、伊佐は英語をあまり話せないため、英語には非常に抵抗をもっている人物として描かれている。彼は、「三十そこそこの男だが、平素英語の話をさせられるのを恐れ、視察官が来た時、二日前から学校を休み、熱もないのに氷嚢をあてて臥ていたことがある」ほど、英語に抵抗を示している。

このような伊佐の行動を田中美代子は、「極端に幼児退行的な、生理的な人間」の行動であるとし、「それこそ、敗戦国の男の、普遍的な屈辱感と自己嫌悪の表明」であると述べている^{一六}。氏の指摘は、すでに諸論者から言及されているように、伊佐を「動かない」「弱者」とするとする見解と通じ合う。

小島信夫は「アメリカン・スクール」の「あとがき」で、「やはり僕は小不具者の小説を書いている」とし、「僕は前には、ユーモアに執着するのは本質だろうと言ったが、それよりも、この世の、この時代の流動性、不安定に対する姿勢からくるといった方がよいかかもしれない」と述べている。ここで作者が「小不具者」としているのは、英語を自由に話せなくて「極端に幼児退行的な、生理的」な行動を示す伊佐のことであろう。そして、彼の「極端に幼児退行的な、生理的」な行動は「占領」という時代の「流動性、不安性に対する姿勢」に因るものと考えられる。

『ストレス学入門』の祖父江孝男によると、「急激な文化変容に際しては必ずストレスが伴う」^{一七}。大東亜戦争中、アメリカはイギリスと共に「鬼畜米英」と呼ばれ、その文化も忌み嫌われていた。しかしアメリカによる占領が始まるやいなや「急激な文化の変容」が訪れる。例えば、戦時中は「敵性語」として忌まれていた英語は、戦後になって時代を先取りするために欠かせない言語として脚光を浴びた。簡単な挨拶から道の教え方などを紹介した『日米会話手帳』が、昭和二〇年九月から一ヶ月の間で四百万部を売り尽くすベストセラーになったのもそのような時代を背景としているからである。このような日本人の外国語認識について入谷敏夫は「一昔前の帝国主義の時代には、日本の精神主義と結びついた日本語が栄えた半面、敵国の理解にとつて必要な外国語教育は縮小され、一たび敗戦となると、母国語に対する情念はうすらぎ、片言の外国語がちまたに氾濫するといった具合に、日本と外国との関係を、終始一貫してみつめるという態度がかけていた」^{一八}と述べているが、これも作者のいう「時代の流動性、不安定」と通じ合う指摘だと思う。

周囲の状況はどうであれ、自分が英語の教師であるため、やむを得ず英語をしゃべらなければならない伊佐にとつては、英語が自分の苦痛の種である。彼が突然「悲鳴に似た叫び声」をあげることや一緒にジープに乗っていた黒人を「後ろから相手をどうかしてしまいたい気持ちにかられる」ことなどは、「急激な文化変容」によるストレスの限界をこえた精神異常的なものに見られる。

文化の変容による精神異常的な現象を考える時に、例えば夏目漱石がロンドンで留学していた時期における「狂気に近い精神衰弱」現象が思い出されるだろう。

夏目漱石がロンドンで「狂気にちかい神経衰弱」にまでなったのは、

留学費の不足による経済的な不安や異国で覚える孤独感だけによるものではない。その原因は「日本人の手持ちの文学的センスで英文学の本質を理解できるかどうかという、英文学研究の根本にかかわるアポリアの解決を、このときの漱石がいやおうなく迫られていたこと」^{一九}にある。更に、「東洋の風土と文学伝統につちかわれた日本人の美意識や感受性、漱石のいわゆる〈趣味〉が、まったく異質な文化圏に根をもつ英文学とどう領略できるかという問い」の問題が根深く絡んでいたと言われている。漱石がいやおうなく英文学に関して研究しなければならなかったことと同じく、伊佐も英語の教師として英語を話さなければならなかった。その負担が伊佐を「狂気にちかいノイローゼ」にまで至らせたのである。

英語の話せない伊佐が披露する「極端に幼児退行的な、生理的」な行動、滑稽な行動は、「時代の流動性、不安定に対する姿勢」言い換えれば「急激な文化変容」による衝撃の一断面であると言えよう。

一方、小島信夫の文学に見られる言語の問題について、江藤淳は、作者が現在の生活に適応するためには、「土俗的な核」つまり、岐阜弁を否定しなければならぬし、反面「土俗的な核」を肯定するためには生活への適応をあきらめなければならないという「深刻な二律背反」^{二〇}を指摘した。ここでも実体のあるものとして岐阜弁を捉えているところには抵抗を感じるが、氏の指摘を踏まえて「アメリカン・スクール」の伊佐については、「現在の生活」つまり占領下の時代に適応するためには、「土俗的な核」の「日本語」を否定しなければならないし、「日本語」を肯定するためには占領下の生活への適応をあきらめなければならない狭間にいる。もちろん、伊佐に自明なものとして「英語」や「日本語」が存在するわけではない。その区別が在らしめているだけである。にもかかわらず、伊佐に「日本語」が実定性のあるものとして認識されるのは、国家レベルで制度化された教育システムやマスコミによって「日本語」というコードを与えられ、その記号体系で世界と向き合っているからである。要するに、伊佐の意識は既成の日本語制度に完全に支配されているのであり、それがために「英語」という文化的コードの享受を拒否しているのである。

しかし、英語に対するノイローゼ、あるいは精神異常的な病症は、伊佐が英語を希求し憧れている心の反証ではないだろうか。彼はアメリカ

ン・スクールの校舎で女生徒の英語を聞いて、それは「小川の囁きのような清潔な美しい言葉の流れ」だと感じる。また、「このような美しい声の流れである話というものを、なぜおそれ、忌みきらってきただのか」と考える。

彼は心の疲れでくらくらしそうになって眼をつむったのだが、だんだん涙が出てくるのをかんじた。なぜ眼をつぶっていると涙が出てきたのか彼には分らなかったが、それは何か悲しいまでの快さが彼の涙をさそったことは確かであった。彼はなおも眼を閉じたまま坐りこんでしまったが、その快さは、小川の囁きのような清潔な美しい言葉の流れであることがわかってきた。(略)

彼はこのような美しい声の流れである話というものを、なぜおそれ忌みきらってきただのかと思った。三

伊佐は通りぬけるジープの音にも気がつかず、「小川の囁きのような清潔な美しい言葉の流れ」、「軽快なピアノ小夜曲や遁走曲のような女生徒のおしゃべり」に心酔しているが、この時の伊佐の告白は柄谷行人のいう「真の自己」と似通ったものである。柄谷行人は「真の自己」があるかのような幻影が根をおろすのは、「自己自身にとつて最も近い『声』——それが自己意識である——が優位になったとき」であるとし、「そのとき、内面にはじまり内面に終るような『心理的人間』が存在しはじめる」^{二一}とした。要するに、英語の享受を拒否していた伊佐が「このような美しい声の流れである話というものを、なぜおそれ、忌みきらってきただのか」と思ったのは、「幻影」にすぎないが、「自己自身にとつて最も近い『声』」に出会い、「心理的人間」になり得たからである。

伊佐は英語を希求する「真の自己」を発見したが、他方で自分に「日本人が外人みたい」に英語を話すなんて、バカな。外人みたいに話せば外人になってしまう。そんな恥かしいことが……「おれが別のにんげんになつてしまふ。おれはそれだけはいやだ!」^{二二}と言ひ聞かせる。

人間は生まれる時からいわゆる生物学的肉體だけではなく、文化的制度に拘束され、その身体は自然と文化の狭間に置かれる。伊佐の身体も自然に近い音と接し心理的な自分の幻影に出会ったが、それと同時に文化的制度つまり日本語の制度に拘束されてしまふ。伊佐は、よその国の

言語である「英語」を希求することが、「日本語」によって形成された「日本人」のアイデンティティを否定してしまうことであると意識し、「英語」と「日本語」の狭間で苦悩する。要するに、伊佐は「日本語」のもつ制度やイデオロギーに支配されている故に、意識的に英語の享受を拒否したのである。

特に、「アメリカ被占領期」という時代を視野に入れて考えると、伊佐が「英語」と「日本語」の差異に翻弄され、滑稽な行動をしてしまう姿は象徴的である。「英語」と「日本語」で象徴されるそれぞれの国家イデオロギーが真正面で衝突し、一方のイデオロギーが他方のイデオロギーを支配する構図の中で、伊佐は英語のイデオロギーに抵抗しながらも、皮靴が自分の足を痛め一步一步が苦しくても、ただただアメリカン・スクールへ行くだけである。そこで、読者は無気力で無気味な伊佐に出会い、「支配」「被支配」という占領構図を読むのであろう。伊佐を含んだ見学団は、アメリカの便乗者である山田と柴元を先頭に「そろそろと四人のように動き出し」てアメリカン・スクールまで行くのだが、要するに彼らのアメリカン・スクール行は、日本のアメリカ行の象徴であるといえよう。

四

以上、「アメリカン・スクール」における三人の英語教師がアメリカ被占領下で「英語」を受容し、反応していく姿を検討した。

「近代国民」として成育された彼らは、「日本国民」のイデオロギーを背負っているが「英語」を媒介に、時には「アメリカ人」を演じ、時には「日本人」を主張する。アメリカ人以上にアメリカ人を演じる山田は、言語に潜む権力を見抜き、それに縋り付いていく人物であった。それはミチ子も同様である。一方、伊佐は「日本語」のもつ制度やイデオロギーに支配されている故に、意識的に英語の享受を拒否し、「日本語」と「英語」の狭間で悩みつづける。

「強者」と「弱者」あるいは「動く人」と「動けない人」という物差しでこれらの人物を定めることはできない。三人の英語教師は見事に成育された「近代国民」として「日本語」と「英語」がもつ政治性、イデオロギーに翻弄され、操られながら、「そろそろと四人のように」アメリカン・スクールまで行くのである。

カン・スクールまで行くのである。

- 一 ベネディクト・アンダーソン『増補想像の共同代』白石隆・白石さや訳 ZEN 出版 平成九年五月 二一〇―二二二頁
- 二 田中克彦『ことばと国家』岩波書店 昭和五十六年一月 一六頁
- 三 ベネディクト・アンダーソン『創られた「国民言語」―自然に來たるものなし』『文学界』平成二年一〇月 四五頁
- 四 『小島信夫全集六』講談社 昭和四十六年七月 三三二頁
- 五 田中美代子『「アメリカン・スクール」』『解釈と鑑賞』昭和四十七年二月 一〇七頁
- 六 利沢行夫『小島信夫における風刺と抽象』『解釈と鑑賞』昭和四十七年二月 一三頁
- 七 江藤淳『小島信夫の「土俗」と「近代」』『われらの文学』二 小島信夫 講談社 昭和四十二年六月 四六二頁
- 八 前掲書。註七に同じ。四二〇頁
- 九 『小島信夫全集四』講談社 昭和四十六年七月 二三〇頁
- 一〇 利沢行夫『小島信夫における風刺と抽象』『解釈と鑑賞』昭和四十七年二月 一三頁
- 一一 『新日本文学全集 第九卷』集英社 昭和三十九年三月 四二〇頁
- 一二 田中美代子『「アメリカン・スクール」』『解釈と鑑賞』昭和四十七年二月 一〇八頁
- 一三 前掲書。註四に同じ。二四三頁
- 一四 佐藤栄孝編『靴産業百年史』日本靴連盟 昭和四十六年三月 三六八頁
- 一五 前掲書。註四に同じ。二四四頁
- 一六 田中美代子『「アメリカン・スクール」』『解釈と鑑賞』昭和四十七年二月 一〇八頁
- 一七 加藤正明・森岡清美『ストレス学入門』有斐閣 昭和五〇年七月 二〇八頁
- 一八 入谷敏夫『言語心理学のすすめ』大修館書店 昭和五八年五月 二二二頁
- 一九 三好行雄『鑑賞日本現代文学 第五卷』角川書店 昭和五九年三月 一七頁
- 二〇 江藤淳『小島信夫の「土俗」と「近代」』『われらの文学』二 小島

- 信夫』講談社 昭和四二年六月 四五八―四五九頁
二 『小島信夫全集 四』講談社 昭和四六年五月 二三二頁
三 柄谷行人『日本近代文学の起源』講談社 昭和五五年八月 七九頁